



にしふかい



「認めて、褒める」ことの大切さ

最近、「自分は、褒められて伸びるタイプですから。」などと言う人が増えています。人は、褒められると自信をもちますし、「自己肯定感」が高まることが知られています。私も褒められると、素直に嬉しくやる気が湧いてきます。でも、「褒め方」を間違えると、時として上辺だけになり、逆効果になることは案外知られていません。

子どもがテストで100点満点をとった時、「すごいね!」「やったね!」と声をかければ、子どもは、誇らしそうにするでしょう。でも、いつもいい点数を取れるとは限りません。満足な結果にならない時は、かける言葉を間違えるとテストを隠したり、誤魔化したりしてしまう子も時々います。

本校でも課題となっている「自己肯定感」の向上。自己に対して肯定的な評価を抱えている状態を指す言葉です。子どもの「自尊感情」を高めることは、とても大切だと考えます。



一方、学校生活では児童の「規範意識(きまり等を進んで守ろうとする意識)」の重要性も強調されています。そして、「規範意識」と「自尊感情」を高めることを併せて考えると、「自己有用感」を育てることが大切になります。それは、人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という「自己有用感」は、自分と他者(集団や社会)との関係を肯定的に受け入れられることで生まれる評価だからです。

では、「自己有用感」を高めるためには、どのような働きかけが必要なのでしょう。それには「認めること」が大切だと言われています。例えば、「頑張っていたからね。すごいなあ。」「ありがとう、助かったよ。」「あなたの〇〇なところ、素晴らしいと思うよ。」などの言葉かけです。

また、「褒めること」と「認めること」とは、何が違うのでしょうか。一般に大人が子どもを「褒める」時は、大人側の基準や水準で「褒める」ことが多いように思います。反対に言えば、水準に達しない場合には「頑張りがなさい」と叱咤激励することになります。それに対して、「認める」という行為は、基準や水準が子どもの側にあります。子どもなりのこだわりで努力したり、工夫したりしたことを「認められたい」のです。子どもの実際の行動と向き合うことなく、表面的に褒めても、子どもはそれほど喜びません。子どもからすれば、「100点をとった自分」も「100点をとれなかった自分」も、同じ「頑張った自分」です。自分の存在をまるごと認められることで、自分に自信がもてるようになります。「認めて、褒める」ことを大切にしたいものです。

年末年始、家庭でお手伝いをする機会が多くあると思います。「自己有用感」が高まる言葉かけをよろしくお願い致します。



今年もあと1ヶ月となりました。新しい年を迎えるにあたり、今年のみ振り返りもしながら頑張ったことを認め、新たな意欲につなげていきます。

本年も西深井小学校を見守り、支えていただいた地域の方々、学校教育にご理解とご協力をいただきました保護者の皆様、ありがとうございました。

校長 永山俊介